凌霜館関係史料

■歴史資料

1）凌霜館「新築并開場式諸費簿」（明治 15 年 12 月）　村野家文書 C-2

⇒凌霜館新築その他にかかった経費の記録、石阪公歴が盃 50 個を発注した記録あり
（3）の盃か

2）凌霜館開場式「出席簿」（明治 16 年 5 月 6 日）　村野家文書 C-3

⇒凌霜館開場式に出席した人名を確認できる
野津田村・小野路村・八王子・相原村・溝村・図師村・豊田村・平山村・金井村・鑓水村・大蔵村・岡上村・小山田村、客員　計 107 名

3）「凌霜館」銘入り盃　年代不明　当館蔵

⇒資料館敷地内より発見、新築工事時の土砂内から職員が発見

4）「凌霜館出席人名帳」　明治 16 年（推定）6 月　石阪家文書

⇒石阪襁（陸奥）の剣術練習記録

5）村野常右衛門自叙文　年代不明　村野家文書 M-15

⇒村野常右衛門が凌霜館設立までの自分の来歴を記したもの
「十六年凌霜館ヲ建ツ蓋シ以為ヘラク時勢ノ進ム所爾来或ハ所謂有形的組織ノ甚迂遠ニシテ無形的団結ノ尤トモ必要ナル機会ニ接スルコトモアルヘク果シテ之レアランカ今ヨリシテ之ガ準備ヲナサンバ俗ニ所謂猪ヲ見テ矢ヲ矧クモノニ近ク到底好結果ヲ得ヘキニアラズト是此館ヲ建ツル微旨ニシテ只力士剣客ヲ待スル所似ノ一道場ニ過キサルカ如キモ其実精神ノ確固ニシテ且其技倆ノ妙身体ノ強以テ他日我カ用ニ供ス可キモノヲ養成スルノ意ニ出テシモノナリ而シテ遂ニ其ノ効力ヲ見ルニ至ラザリシ」

6）『皇国武術英名録』明治 21 年　小田原市立図書館

⇒剣術の門人を地域ごとにまとめたもの、凌霜館に通う人名が記されている。神道無念流、野津田村を中心に、周辺村の村名が記載されているが、本籍地ではないため、寄留者は野津田村と記載されている。

7）大須賀明殺害事件の「予審終結決定」書（明治 25 年 4 月 17 日）

⇒第二回総選挙後に起きた凌霜館生による殺人事件の裁判資料の一つ
凌霜館に寄留（居住）していると思われる大矢正夫が予審の対象となっているが、住所は本籍（神奈川県高坐郡坐間村栗木 3586 番地）が記されている。
凌霜館は「野津田村」としか記されておらず、所在地は確認できず
最も近い番地は村野栄吉の住所（資料館の西側数十メートルの場所、現在は駐車場）

8）「浮浪中凌霜館滞在日誌」（明治 25 年 11 月 11 日～25 日）　石阪家文書

⇒執筆者不明、「凌霜館撃剣部会計方第壱回決算日有志者寄附金」覚書が続く。
徴兵の送別会を凌霜館で行ったなどの記事あり

9）大須賀明殺害事件の名古屋控訴院「判決謄本」（明治 26 年 6 月 26 日）　村野家文書

⇒「神奈川県南多摩郡鶴川村字野津田ニ設立セル凌霜館ニ相集リ……」の記載あるが、番地表記はなし

＊事件裁判関係資料は他にもある

10）大須賀事件関係者村野嘉吉の墓碑銘　大正 15 年春

⇒「……貴族院議員村野常右衛門氏其ノ居村青年修養ノ為メ凌霜館ヲ設ク附近ノ青年耕余ニ相集リ講学練武大ニ志気ヲ砥砺ス……内務大臣品川彌次郎官権ヲ揮ヒ大干渉ヲ行フ君猛然起チテ民党ノ戦士トナル血気熱烈遂ニ村内大蔵ニ殺人事件ヲ演スルニ至リ凌霜館ノ健児亦多ク連坐ス……」

11）土地台帳　明治 19 年

現自由民権資料館敷地所有者変遷

		M19年	M22年	M39年	T11年	S7年	S35年	S36年	S39年	S42年	S47年	S60年	S59年	H2年
897	1	村野栄吉		村野常右衛門	村野国三郎		村野廉一				村野順三・婉子			町田市
	2	—						村野廉一			村野順三・婉子		町田市	
	3	—										村野順三・婉子	町田市	
898	—	村野常右衛門	小林儀兵衛	村野常右衛門	村野国三郎		村野廉一				村野順三・婉子			町田市
899	1	村野常右衛門	小林儀兵衛	村野常右衛門	村野国三郎		村野廉一				村野順三・婉子			町田市
	2	—				内務省								
	3	—						村野廉一			村野順三・婉子		町田市	
900	1	村野常右衛門	小林儀兵衛	村野常右衛門	村野国三郎		村野廉一				村野順三・婉子		町田市	
	2	—				内務省								
	3	—							村野廉一	丸嘉十郎				

＊土地台帳を参考に作成。月日は省略。

…村野常右衛門所有
…村野栄吉所有
…町田市への寄付
…町田市の追加購入

⇒自由民権資料館の敷地は、野津田町 897・898・899・900 番地の大半である（一部は都道）。

そのうち、明治 19 年段階で村野常右衛門が所有していた土地は 898・899・900 番地である。よって凌霜館の跡地の可能性は、898～900 番地になる（もしくは、村野栄吉の理解を得て 897 番地も活用した可能性はあるか）。

12）野津田青年会凌霜会の「決議録」　大正元年

⇒事務所＝現在の野津田公民館（＝野津田学校跡地、明治 41 年鶴川尋常高等小学校へ統廃合のため空き家）を活動拠点としていると思われる。

大正 2 年 9 月 12 日開催の役員会の記事に「村野栄吉氏本会之為非常ナル尽力被下ル氏之斡旋ニテ凌霜館ヲ売捌キシ代金六十円ヲ本会之基本金ノ内へ頂戴致セル様尽力ヲ願フコト」とあり。（野津田青年会「凌霜会」の活動拠点が現野津田公民館に移っている、大正 2 年 9 月頃に凌霜館（建物？）が売却されたことが確認できる

13）渡辺欽城『三多摩政戦史料』大正 13 年

⇒渡邉は青梅。聞き取りなどにより明治前半の三多摩の政治運動をまとめたもの。

前後関係などの誤認が多いため、慎重な史料批判が必要。

凌霜館の紹介はあり、師範学校出身の篠原某を招き、剣術だけではなく、文にも配慮した館の運営がなされた旨の紹介がされている。所在地詳細の記載はなし。

14)「大矢正夫自徐伝」昭和 2 年　厚木市・大矢家文書

⇒「吾が先輩、石坂、村野の両氏ハ、夙に之を慮り、余を凌霜館に寄寓せしめて、住所の安定を与へ、其の生活を資すべく、野津田学校の小使に採用せしめたり。実ハ小使の名義にて、教鞭を執らしめしなり。

大矢が大井憲太郎に宛てた書簡（明治 25 年 6 月 29 日付）に「都留川村野津田凌霜館ニテ大矢正夫」とあり

「祝町田村文武館開館式文」と題した大矢正夫の式辞（明治 26 年 9 月下旬）の大矢の肩書きが「凌霜館主」

＊途中より東京に居住する石阪昌孝の留守居として石阪邸に転居

■文献資料

・村野廉一・色川大吉編『村野常右衛門伝―民権家時代』私家版、昭和 44 年

「若き凌霜館長」の項目あり。「話によるとその建物は、広さ二十坪以上の道場をもつ建物で、民権家たちの謀議にも使われたという。うしろに井戸があり、絶えず竹刀などを担いだ若者たちが出入りし、この凌霜館に宿泊していたという。村野はここに青年子弟を集めて、もっぱら剣術を奨励していたが、それだけでなく師範学校出身の篠原という講師を招いて、政治学習をあわせ行なったといわれている。いま「凌霜館出席人名帳」という文書が残っているが、それを見ると、出席者は村野常右衛門、石坂公歴、村野栄吉など、鶴川の青年が主であったらしい

・色川大吉編『多摩の歴史散歩』朝日新聞社、昭和 50 年

アサヒタウンズが連載した「多摩の歴史散歩」を編集したもの。

「これが凌霜館だったという物置のような建物が現町田市野津田町の並木に残っている」

⇒移築後の写真を掲載。市史・自由民権資料館図説等で掲載。大正 2 年時に売却した凌霜館が移築され利用されていたものと判断できる。

・『町田市史』下巻　昭和 51 年

凌霜館についての記述はあるが、所在地の明記はない。移築後の写真を掲載（アサヒタウンズ提供とあり、アサヒタウンズは 2010 年廃刊。）。

・『町田の歴史をさぐる』昭和 53 年

凌霜館についての記載、写真の掲載あり。巻末に文化財マップがあり、現資料館の場所に「凌霜館旧跡」が図示されている。

・『町田の歴史をたどる』昭和 56 年

移築後の凌霜館写真を掲載、すでに取りこわされている旨の記載あり。

・「昭和 60 年第 2 回定例会市議会会議録」昭和 60 年 6 月 11 日

萩原康好議員「自由民権運動の有力な指導者であり、石坂昌孝先生と並ぶ村野常右衛門先生が当時の青少年の心身の鍛練、錬磨の場として凌霜館がつくられ、そこにあったところであります」

⇒萩原議員は、現若竹幼稚園理事長、野津田（資料館近隣）に居住されており、青年団活動についての聞き取り調査に協力していただいた方でもある。

・『村野廉一回想記』昭和 62 年

村野常右衛門の長男廉一の没後妻喜代によりまとめられた。「自由民権資料館の建設」の項目に以下の記載あり。

「順三、婉子夫妻は、昭和六十年自由民権百年祭を記念して、祖父村野常右衛門に由緒ある「凌霜館」跡地を町田市に寄付を申出た。

これに対し大下勝正市長は市議会の議決を経て、この地に自由民権資料館を建設された」